

飛鳥奈良時代仏教彫刻史における舍利信仰の諸問題
—唐代美術との関連を視野に入れて—

田中健一

論文要旨

仏陀または聖者の遺骨を舍利という。インドにおける仏教美術の出発点が釈迦の舍利を供養するストウパの荘厳にあったことに象徴的であるが、時代や地域ごとの思想的状況とも関連して軽重はあるものの、舍利信仰は、常に仏教に関わる造形活動の一大主題であり続けた。本論文で主に考察の対象とするのは、主に七世紀第四四半期から八世紀、飛鳥後期から奈良時代の仏教彫刻史における舍利信仰の諸問題である。また、この期の日本における造像活動にも大きな影響力を持った中国則天武后期の作例も併せて取り上げる。

本論文は、「序論」に続き、四章からなる「本論」および「付論」があり、最後に「結び」としてこれまでの考察を総括する、という構成である。各論の概要は以下の通り。

「序論」では、「本論」で展開される各章での見通しを提示する。前述のように、本論文は飛鳥奈良時代、およびそれに関連して初唐期の仏教彫刻における舍利信仰の諸問題を扱う。論述にあたっては、次の二点を主な問題意識とした。第一は、日本古代仏教美術史において大陸美術の受容がどのような意識を伴ってなされたのか、という問題。また第二は、日本仏教美術史において仏教思想と王権思想とが如何に関わり、それが如何に造形に反映したか、という問題である。殊に東アジアの仏教国においては、仏舎利の所持をもって正統の仏教国であることを内外に示すという意識が強くみられる。梁、隋といった、皇帝が「菩薩天子」をもって自ら任じた王朝は、いずれもが舍利に関わる大事業を展開した。本論文は、飛鳥後期という時期が、そうした意識が一つの高まりをみせた時期と考え、この期から、上述の問題意識に照らして興味深い事例を選定し、中国唐代を中心に広く東アジア諸国の造形史、信仰史を視野に入れて位置付けることを目指した。

なお、舍利美術に関しては、すでに膨大な研究の蓄積がある。日本における舍利荘厳美術の研究は、しばしば仏教工芸史の分野においてなされ、多くの場合は舍利容器や五輪塔などの形式分類や技術史の文脈で行われてきたが、近年では、空海を日本における舍利信仰の画期と位置付けた上で平安時代初期以降の様相を詳細に跡付け、その造形と教義的展開との明確な関連性を明らかにした研究もみえる。また、彫刻史の立場からも、舍利信仰・瑞像信仰を一つの軸に日本上代彫刻史を通覧した論が提出されている。しかしながら、問

題を個別作例の中で検証する作業が十分になされているとは言い難い状況にある。

「本論」の章立ては以下の通り。

第1章 蒲州大雲寺涅槃変碑像に関する考察

第2章 長谷寺銅板法華説相図の銘文と図像に関する考察

第3章 法隆寺五重塔塔本塑像群の主題構成に関する考察

第4章 八世紀仏教美術史における舍利信仰をめぐって

付論 聖林寺と観音寺の二体の十一面観音像をめぐる諸問題

第1章において、いわば前史として、中国唐代の事例を取上げ、そして、第2・第3章で飛鳥後期から奈良時代初めにおける事例を検討し、第4章、付論でその後の展開を検討する、という構成である。以下に各章の概略を述べる。

第1章で扱われるのは、現在山西芸術博物院に保管される大雲寺涅槃変碑像（蒲州大雲寺碑像）である。大雲寺は、則天武后が自らの政権を喧伝する目的で諸州に設置した寺院であり、碑像は作行きや図像的な重要性からも唐代仏教美術中の最重要の作例の一つとして評価されてきた。その図像構成は、碑陽に、純陀供養、涅槃、摩耶夫人の降下、摩耶哀働、再生説法、葬送、火葬、碑陰には舍利八分、起塔、三尊仏をそれぞれ表すというものである。すでに多くの研究があるものの、再生説法という主題の問題、則天期に本碑像が制作された意義など、幾つかの点でなお検討の余地を残している。また、作品の重要性を考慮したとき、造像記に必ずしも詳細な読解が施されてこなかった点にも問題があった。こうした研究状況を鑑み、造像記の読解を試み、併せて碑像に表された図像構成の検討を通じて、造像の背景となる歴史的、思想的状況を論じた。

第1節において碑像の概要を確認した後、第2節で図像的特徴に関する考察、第3節で造像記の読解を試みている。第2節において、碑像の図像構成上注目したのは、涅槃と共に弥勒下生を表す点、再生説法を伴うという点で、これらは則天期に顕在化した傾向であることを指摘した。またその一方で、敦煌第332窟涅槃変相図や浜松市美術館仏碑像など、同時代の作例との間の図像細部の相違点を指摘し、地域的な文脈も考慮すべきことを論じた。第3節においては、造像記を検討する中で、大雲寺碑像が単独での造像ではなく、蒲州大雲寺における「弥勒重閣」の造営事業と一連のものである点に大きな特徴がある点を指摘した。また、碑像の制作された蒲州大雲寺の前身寺院は仁寿寺と推定される。第4節ではここから二点を論じた。第一に蒲州仁寿寺は隋代の仁寿舍利塔事業にも関連しており、こうした舍利信仰史上の重要性を、武后政権の側が利用するという状況を想定することが出来るのである。また第二点として、仁寿寺を中心に展開した蒲州における曇延系の涅槃

宗の活動を、碑像を含む一連の造営事業の背景として想定した。また、第5節では大雲寺碑像に酷似した図像内容を持ち、蒲州に隣接する安邑に伝来した涅槃変碑像を取り上げた。この碑像は現在所在不明であるが、京都大学人文科学研究所蔵の調査カードをもとに、大雲寺碑像と比較検討した。涅槃経への関心が強い蒲州においては、再生説法や純陀供養といった図像は、如来常住思想に関わって捉えられた可能性があることを指摘した。

この様に、蒲州大雲寺碑像は、則天武后政権と、舍利信仰や如来常住思想との関連性をキーワードとして捉えることが出来る。周知の通り、武后政権の正統性を保証するため、幾つかの論理が用意されたが、ひとつに長安・光宅坊における舎利の発現があり、また則天武后を弥勒如来に擬すという付会があった。蒲州大雲寺碑像は、伝来・銘文・図像内容といった諸点から、そのような時代状況を端的に示す作例として改めて評価出来よう。これを踏まえて、次章以降、日本での事例が検討される。

第2章では、奈良県長谷寺に伝来した所謂銅板法華説相図を取り上げた。本銅板は、『法華経』「見宝塔品」にその涌出の物語が語られる多宝塔を中心に、千仏等を併せ、押出、半肉鑄出、線刻等の技法で表現した古代仏教美術中の優品である。様式からは七世紀末から八世紀初め頃の制作が予想される。銅板には銘文が付され、「降婁漆菟上旬(戊年七月上旬)に「道明」によって「飛鳥清御原大宮治天下天皇」の奉為に敬造されたことが知られる。銅板に関する既存研究の問題点として、銘文の天皇の比定(天武、持統など)及び戊年の年代比定(686年、698年、710年など)が定説を見ないことなどが挙げられる。こうした研究状況を踏まえ、本章では、表題作品の細部モチーフを検討し、附された銘文を分析することで、銘文に語られる造像意図が図像選択に際して如何に影響したかを明らかにし、さらに、銅板の図像に投影された天皇観を問うた。

第1節において銅板の概要を確認し、第2節では、主に初唐期の「見宝塔品」を表す諸作例との比較により、本銅板の図像的特徴を検討した。そして、銅板の図様は、「見宝塔品」における宝塔涌出の物語を表現するにとどまらず、むしろ「千仏」と「多宝仏塔」との表現により関心が向けられていることを指摘した。これを踏まえた第3節が論説の中心で、上の二つのモチーフが、同時代の東アジアにおける仏法と王権思想との結びつきを反映していることを指摘した。まず千仏について。銅板は千仏中に如来倚坐像を配するという形式をとるが、これは龍門石窟萬仏洞や鞏県石窟千仏龕など、則天期を中心に多く遺例のみられる優填王像に類例がみられる。ここから、仏法の継承性と永続性を示唆し、ひいてはそこに帝統の継承を仮託する図像として理解した。また第二に、銅板の多宝塔が舍利壺を明示する点について。『法華経』成立史の研究に照らせば、「見宝塔品」を含む『法華経』

の所謂第二・第三類では、舍利塔供養の不要が示唆される。したがって、「見宝塔品」の経説を表すという意識のみからは、銅板のような図像は生じ難く、寧ろ感応による多宝塔の涌出といった事例に類似性が見出されることを指摘した。注意すべきは、前章で論じたように、則天期を一つの頂点として、舍利は転輪聖王信仰と結びつくことで国家の正統性を保証する存在として捉えられる点である。銅板の多宝塔も舎利の涌出を主題の一つとし、背後には帝統の正統性を検証する意識があると想定した。さらに第4節では、これに基づき、銘文に記される天皇比定の問題に言及し、天武天皇の皇統を意識した蓋然性が最も高いことを示した。

第3章では、日本古代彫刻史における平城京遷都後最初期の基準的な作例として著名な法隆寺五重塔塔本塑像群を取り上げ、その主題構成の問題を論じた。塔本塑像群は、「涅槃」「分舍利」「弥勒仏」「維摩詰」という四主題を組み合わせている。第1節で塔本塑像群の概要と、主題構成に関する先学の諸見解をまとめている。既存の研究を通覧すると、塔本塑像群の主題解釈上、南に「弥勒」を、北に「釈迦の涅槃」を配するという特殊な方位関係と、東面に「維摩」が配された思想的背景の二点について、検討の余地が残されていることを示した。第一の点について、既存研究の重要な提言は、この配置法がキジル石窟にも見られるという宮治昭氏の見解であるが、キジル石窟では弥勒は交脚の菩薩として表されており、倚坐の如来形をとる塔本塑像とは必ずしも一致しない点に注意を要することを指摘した。また第二の点について、これまで「維摩」が釈迦の説法を象徴するとみ、東回りに釈迦の説法から涅槃、弥勒へという時間順を追って表すとする説や、在家の仏教者である「維摩」を、聖徳太子所縁の寺院という法隆寺の特質に引きつけて理解する見解がなされてきたが、何れも批判が加えられている。

以下第2～5節では、各面毎に関連作例を挙げて主題構成の思想的根拠を検討した。第2節では南面の「弥勒仏」を検討した。初唐期の弥勒造像などに照らしても、この弥勒は弥勒下生信仰に基づくと理解すべきと思われる。塔本塑像中、南面の保存状態が他の三面と比べて損傷が甚だしい点、仏塔が南を正面とする点からも、「弥勒」は塔本塑像中の中心に位置し、塔本塑像群は北面「涅槃」と南面「弥勒下生」という南北線を軸に主題が構成されている可能性が高いと論じた。第3節で検討したのは北面の「涅槃」である。「涅槃」の中国初唐期の造像史については本論文第1章で検討した通りである。釈迦の死を表す涅槃と、釈迦後の当来仏である弥勒とを組み合わせることそれ自体は、ある意味では当然のことであるが、弥勒下生に重点を置く形で両者が結びつく構成は、則天期を中心とする中国の風を受ける可能性を指摘した。第4節で西面「分舍利」、第5節で東面「維摩」を検討

し、ともに仏法相承の正統性に関わる主題構成であるとの見解を提示している。第4節では、西面「分舍利」が表現上北面の「涅槃」とは一続きのものとは言い難いことを示した。分舍利は中国においても独立した主題として制作されたとみられるが、例えば泉屋博古館所蔵の舍利容器など、中国漢民族の伝統的な皇帝の姿の人物を中心に周辺諸国の人物を配する作例が注目され、仏法の正統に関わる主題であった可能性を想定することができる。次に、第5節では維摩詰像土について論じる。中国における維摩経変は、特に図像内容が充実する初唐期以降において、外国使節図や皇帝図を伴うものが散見される。これは『維摩経』「文殊師利問疾品」と「方便品」とを組合せ、中国における仏法の正統性に関わる図像として理解された可能性が指摘されており、舍利八分と同質の内容を含むものといえる。『維摩経』においては、弥勒菩薩が釈迦の後継者として委嘱を受け、また、維摩の出自は東方の仏国土である妙喜国であると語られており、こうした経典の内容が五重塔の構成に影響を与えた可能性を指摘した。第6節では、こうした主題構成が、長谷寺銅板法華説相図と同質の意味を発生させると論じた。八世紀初頭は、儀礼や外交の場で前代とは異なった国家観が表面化し始める時期であり、大仏開眼会において奉納された芸能の上演など、八世紀中葉に一層明確化する同心円的な国家観の萌芽ともいえるものが、法隆寺五重塔の主題構成に読み取りうるとの解釈を提示した。

第4章では、八世紀の日本における仏舍利信仰と造形の関係を扱う。注目するのは、『唐大和尚東征伝』の鑑真将来の将来品目に記される「如来肉舍利三千粒」及び「阿育王塔様金銅塔一區」である。第1節で前章までを振り返りつつ、問題の所在を確認した。八世紀には、身舍利とならんで法舍利が重視されるようになり、また仏像への舍利納入の事例がみえ始める時期である。こうした八世紀の舍利信仰の在り方が、前後する時期の様相と、どこまでの連続性を持ち、またどの様な差異をもつのか、この点を考察するのが本章の目的である。

上述の鑑真舍利は戒律の場で機能した可能性が高いことが指摘されており、これが舍利信仰の隆盛をもたらす一因となったことは想像に難くない。第2節で検討した、隅寺毘沙門天像からの仏舍利発現に端を発する一連の事件は、その現象の一つと目される。すでに指摘があるように、この事件は、光宅坊での舍利発現が武后政権の正統性の喧伝に利用されたことを受け、それが日本で翻案されたものとみられる。さらに注目すべきは、この時の宣命の文言では、舍利が「全身」とされていることである。これは『法華経』「見宝塔品」にみえる多宝如来の「全身」を示す可能性が高いように思われる。想起されるのは七世紀半ばの銘をもつ所謂「大唐善業」多宝塔塼仏で、ここでも宝塔を捧持する武装形が見える。

また鑑真の法統のもとにあると目される道宣の『戒壇図経』に毘沙門天と仏舍利との関係が述べられる。この道鏡の法王叙任に関わるこれら一連の事件は、鑑真のもたらした舍利信仰が日本での仏教造像史に影響を与えた一事例とみることが出来る。

次に、第3節・第4節では、「阿育王塔様金銅塔一區」を検討した。これは、『集神州三宝感通録』ほかに記載される鄞県阿育王塔を模したものである。鄞県阿育王塔に関わる信仰史として、後代の呉越国王・錢弘俶が阿育王の故事に倣って八万四千小塔の造立を行ったことが特筆されるが、これら錢弘俶塔の特徴が『東征伝』の所説とよく一致する。阿育王塔の四面の本生図はいずれも「尸毘王本生」、「薩埵太子本生」、「快目王本生」、「月光王本生」といった捨身に関わる図像である。これを受けて、第4節ではその受容の問題を論じた。注目するのは大きく二点である。第一は、第2章・第3章で考察した皇帝観・国家観と舍利関連遺品との関連が、八世紀中葉という時期にあつてはどの様な形を取るのかという問題である。『僧尼令』が含みこんだ戒律思想は『四分律』という所謂小乗戒であり、そこでは焚身・捨身が不法行為と規定された。対して、大乘戒を説く『梵網経』の第十六輕戒においては、捨身は菩薩行としてむしろ推奨される。さらに、七世紀後半から八世紀初頭期の所謂国家仏教の確立期においては、天皇は、仏教の外護者としての轉輪聖王という意味付けが付与されていたが、八世紀中葉、『梵網経』菩薩戒を受けることで、仏教の内護者としての「菩薩戒弟子皇帝」に変化したことが指摘されている。このような天皇に関する觀念、また戒律思想といった思想上の転換は、この阿育王塔の主題にも良く合致すると捉えることが出来よう。また第二に注目したのは、阿育王塔がこのとき日本に定着した形跡がみえず、この阿育王塔様を基にした作例が現存しない点である。関連して、日本においては、玉虫厨子といった例外を除き、本生譚を造形化することが定着しなかったことを指摘した。このことの背景は、今後も検討を重ねるべき重要課題といえるが、さしあたり、本節では主題としての本生や捨身が中国において盛行したのが南北朝時代であるといった複合的な要因を指摘している。

なお、第4章には付論として、「聖林寺と観音寺の二体の十一面観音像をめぐる諸問題」をおさめた。作風・技法面から八世紀第三四半期頃の官営工房に連なる作例として位置付けられる表題の二体の十一面観音像について、主に細部表現に着目し、その教義的・仏教史的な意味付け、造立背景を論じている。第1節で両像の形状、作風、技法といった諸点の特徴を確認し、第2節で図像的特徴を検討した。特に注目したのは頭上面の相貌表現である。十一面観音像の頭上面、殊に右辺牙出面の相貌表現は、菩薩相から忿怒相へと変化していくことが知られ、従来、十一面観音經典に説かれる造像法の記載が相貌表現に影響

しているという説明がなされており、表題像がそうした変化の画期に位置付けられることを改めて確認し、十一面観音経のみでは白牙上出面の変化を説明できないことを指摘した。続く第3節で、天平十五年以降に書写記録のみえる慧沼『十一面観音神呪心経義疏』による解釈と、頭上面との関連を検討した。すなわち、『義疏』には、牙上出面が礼拝者の清浄性護持に関わるとする解釈がみえる。上述の頭上面の面貌表現の変化には、かかる解釈が影響していると思われ、ひいては八世紀初頭の唐に於ける法相教学の観音解釈が影を落としている可能性があるとする見解を提示した。その上で、同期に官僧の清浄性護持が重要性を増し、官僧による山林修行が盛行するという歴史的状況が、表題像の造立背景として想定されると論じた。付論において分析したのは、八世紀における観音信仰に関するものであり、直接には舍利信仰に関わるものではない。しかしながら、こうした清浄性護持に対する意識がこの期に高まりを見せることは、第4章において論じられた、阿育王塔の受容状況にも関連するように思われる。

本論文の締め括りとなる「結び」では、本論の各章で論じてきた諸問題を改めて総括した。以下、本論文での主要な論点を改めて概観しておく。

東アジアにおける仏教美術を理解する上での、舍利信仰の重要性は、転輪聖王信仰と結びつくことで、舎利の所持が国家の仏教の正統性を示すという観念にある。第1章で論じた蒲州大雲寺涅槃變碑像は、その様な観念が高潮した初唐、特に則天期の時代的な状況を濃厚に伝えるものといえよう。皇帝が自らを弥勒下生に擬し、舎利の発現が政権の正統性の喧伝に利用された則天期の風潮は、日本においても天武天皇の皇統が確立しようとする七世紀末から八世紀初頭という時期、第2章で論じた長谷寺銅板法華説相図にみることが出来る。同作品は、図像銘文ともに、天皇を仏教的な理想王であると同時に弥勒にも等しい存在であるとして、天武天皇の皇統の正統性を顕彰している。更には、帝統の正統を殊更に強調することで、「天皇所縁」としての自らをも主張しようとする意識がみられる。第3章で論じた法隆寺塔本塑像もまた、則天期の風を受け、国土の仏教の正統性に対する意識を読み取り得る事例である。舍利に対する同様の観念は、八世紀中葉の隅寺毘沙門天の事例にも見ることが出来るが、第4章で注目した「阿育王塔様金銅塔」は、八世紀初頭とは異なった天皇の在り方を思わせる。捨身を主題とした本生譚を含むこの聖遺物は、図像内容が鑑真の伝えた戒律思想に合致すると同時に、「菩薩戒弟子皇帝」を目指した八世紀半ばの天皇にとって相応しいものである。空海が日本における舍利信仰の画期となったのは確かではあるが、この様に、中国則天期を中心とする初唐期の舍利信仰は、幾つかの点で変容しながらも、飛鳥時代後期から奈良時代に到る日本仏教彫刻史に与えた影響は決して

看過できぬものがある。このことを改めて強調して、本論文の結論とした。